

北方民族の圧力に屈した宋

勃興する遊牧民国家 中華世界の覇権は北方民族へ

宋代には、周辺の遊牧民族が力をつけ、中華王朝を脅かす動きが活発となった。10世紀初頭に耶律阿保機が建てた遼は、

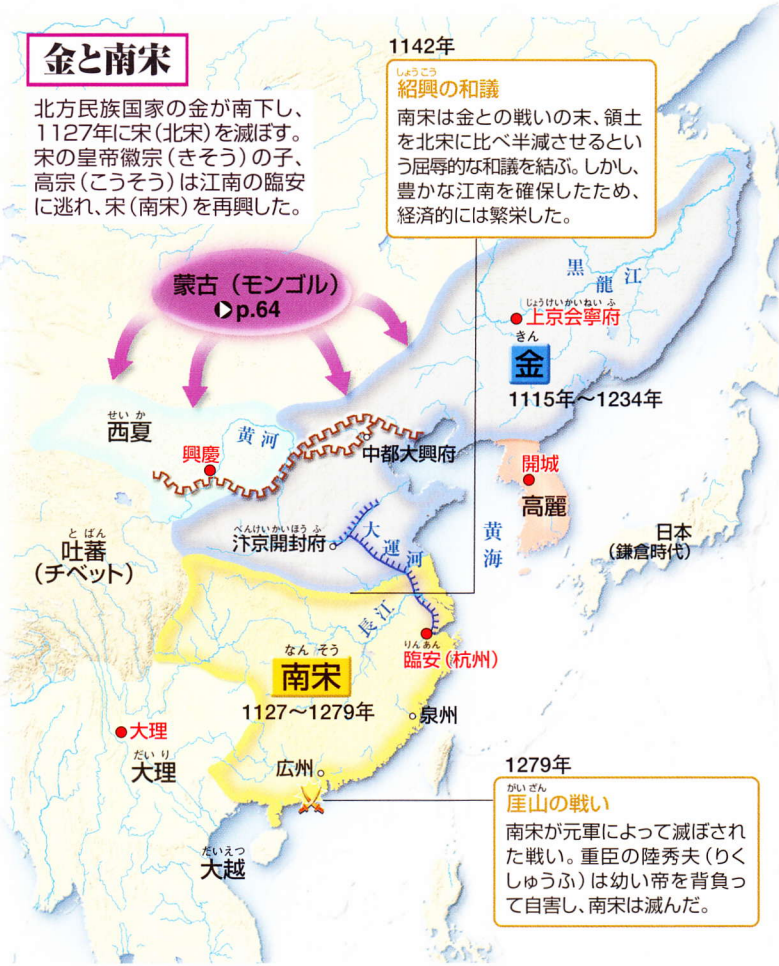
五代の後晋から燕雲十六州を割譲させたあと、宋にも迫り、毎年銀や絹を贈ることを約束させた。また、チベット系民族が建てた西夏も遼と結んで宋を脅かしたため、宋は銀や絹、茶を贈った。宋では国防と外交に要する経費が国家



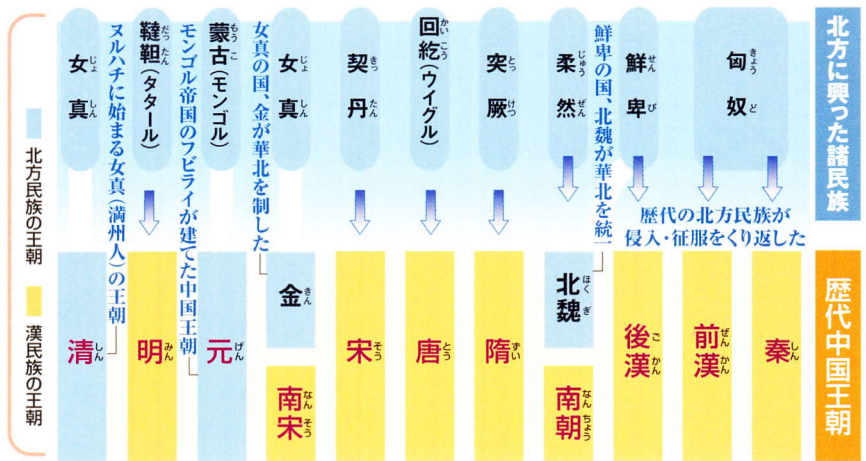
宋は北方民族の圧力に抗しきれず、華北を明け渡して豊かな江南に南宋を建てる。

北方民族の脅威

中国北方を根拠地とする遊牧民族は、高い機動性でたびたび中国王朝を脅かした。歴代の中国王朝は、ときには武力で、ときには宥和によって北方民族の侵入を防ぐことに努めた。戦国時代から営々と築かれた万里の長城も、北方民族に備えるものであった。しかし、蒙古の元、女真（満州人）の清のように、数で圧倒的に勝る漢民族を征服した異民族もあった。



圧迫されながらも、経済的には繁栄した南宋
南宋は金の華北支配を認め、臣下として大量の銀などを贈ることとなった。しかし、豊かな生産力と諸国との貿易で、経済的には繁栄する。広州、臨安、泉州といった港市は東南アジア諸国との貿易港として栄え、ムスリム商人の来航も増えた。日本や朝鮮の間では私貿易もさかんとなり、日本の平氏政権との日宋貿易では多くの文物が日本にもたらされた。しかし、13世紀にはモンゴル高原に興ったモンゴル帝国（P 64参照）がユーラシア大陸を席巻。モンゴル高原から華北へ南下して西夏、金を滅ぼし、ついに南宋をものみ込むことになる。



Key Word

王安石の改革

遼や西夏に対する軍事費増大などによる財政難と、社会的動揺を解消するため、6代皇帝の神宗(しんそう)が王安石を登用して富国強兵を旨とする改革・新法を実施させた。これにより財政や治安は改善の兆しを見せたが、従来から利益を得ていた大地主・大商人などを代表する司馬光(しばこう)らの反対を受け、間もなく廃止された。